

に侵食されるように重なり合う。そうした時間の揺れのよ
うな現象は、電車が清水トンネルを通過するあたりから起
こり、それが伏線となって、哲夫は最後には順子が若い時
に経験し封印していたつらいできごとを知ることになる。
だが、メインはあくまで哲夫が、父が子ども時代を過ごし
た長岡の家を訪れる物語である。

父が暮らしていた家はお屋敷ともいえる旧家で、いまは
取り壊され何軒かの家が建っている。長岡に着いてホテル
に荷物を置いた哲夫が、祖母から聞いていた道筋の通りに
歩いていくと、小路から自分を導くような声が聞こえ、哲
夫はとっくに取り壊されたはずの屋敷を目にするのだ。そ
して、その子ども（子ども時代の父親）と出会い、父親
の子ども時代のさまざまなドラマや、家族の姿に立ち会う
のである。

通常、こうした不思議な体験は、哲夫だけの密かな体験
として描かれるだろう。だが哲夫は自分が見聞きしたこと
を順子に話し、後で長岡にやってきた父に話すのはさすが
に思いとどまるが、なにやら以心伝心という感じなのであ
る。というよりも、哲夫の体験は、父親によって仕組みれ
たという印象がぬぐいきれない。むしろ、ここでの哲夫は
父親の分身であり、父親の雅之にとっては、息子の哲夫の
旅によって、自身の子ども時代から現在までの時間の意味
が全きものになるという、そうした関係性のように思われ

る。

角野栄子の『ラストラン』の登場人物たちの関係性は、
ちょうどその逆といえるだろうか。主人公のイコさんは七
十四歳で、ファッシュンデザイナーを引退した悠々自適の
身である。しかしそうした日々には飽き足らず、かつての趣
味であるバイクでのツーリングに再挑戦する。目的地は彼
女が五歳の時に亡くなった母の故郷である。イコに母親の
記憶はほとんどなく、写真なども空襲で焼けてしまった。
ところが、母の十二歳の時の写真が出てきて、そこに「岡
山県川辺」と記されていたのだ。

バイクでの旅は思いのほか順調で、無事川辺に着き、母
の生家もまだ残っていた。そこで、イコは母の「幽霊」と
出会うのである。ただし、その幽霊は写真と同じ十二歳の
時の姿であり、彼女にはそこから先の（東京に出て結婚し、
イコを産んだという）記憶はなかった。その幽霊ふーちゃ
んにとっては、イコはむしろ保護者のように思える相手で
あり、イコのバイクツーリングに付いてくるのだ。そして、
ラスト、一緒に東京にやってきたふーちゃんは、ついに自
分が誰だったのかを思い出し、イコが成長した自分の娘で
あることも認識する。ここで母親は思い残すことなくあち
らの世界に旅立つと思いきや、「だれも文句は言わないわ。
今は今よ」と、七十四歳の娘と十二歳の母親は、二人で暮
すことを選択するのである。こちらもなかなかに捻破りな